

「キツネ」の話

～民俗調査雑感～

明治は急速な勢いで遠くなりつつある。特に生活様式の画一化により地域の特色は次第に薄らいでいる。一刻も早く記録にとどめておかなければならないのだが、焦る気持ちばかりが先にたってなかなか具体的な活動として進んでいない。まことに口惜しい限りだがそれでも機会あるごとに年配の方々から話を聞くように努めている。特に去年は寺坂地区を中心に延40人を超える方々から貴重な話をうかがうことができた。お忙しいなか、私の繰りだす稚拙な質問に丁寧なお答えをいただいた。感謝にたえない次第である。ここでは採集メモの一部を紹介し、調査をすることの意義をあらためて確認してみようと思う。

キツネに化かされた話……

●兄が琵琶（平塚）から帰る途中、キツネに化かされた。丸髻を結って、いい着物を着たオカミさんだったという。道案内されて、どこまでもついていったが、気がつくともカミさんは消えてしまい、いくら呼んでもいなかったという。結局、鷹取山の方に迷い込んでしまった。（須藤カメさん 明25生）

●昭和16～17年頃、弟の友人がだまされた。虫窪が黒岩の祭りのとき、娘がいたので、その後をつけてみようと言いだした。夜もおそいで皆がとめたが、友人はそれを振り切って後をつけていった。朝方、七国峠あたりで腰まであるムギのなかをズカズカ歩いていたのを、打越（二宮）の人が見つけて家まで送り届けてくれた。一晩中そこを歩き回っていたという。（小早川マキさん 大9生）

●おじいさんが家に帰ったとき、家のなかに入ろうとしても錠口（戸口）が見つからず困

ったことがよくあった。オーイオーイと呼ぶ声がするので、家の者は「またおじいさんがキツネにやられてんだべ」といって戸をけると、キツネがはなれたという。おじいさんは錠口の真前に立っていたのだが、それでいて錠口が見つからず家に入ることができなかったという。（鈴木光蔵氏 大15生）

●いくつかのときだったか、小ヶ原の方から、ずーっと提灯みたいな灯りが並んでいた。

（須藤カメさん 明25生）

●虫窪の貝殻地を夜中に通ると、よく石をぶつけられたという。キツネの仕業だろうとおじいさんが言っていた。（小早川マキさん 大9生）

●万田境の畑で、雲ひとつない夏の日、急にあたりが真暗になり、一寸先まで見えなくなってしまった。歩いてはいけないと思い「おめーたち、人をだまそったって、こっちゃだまされたりしねーから」と悪たれてそのまま立っていた。すると、すーっと明るくなり元に戻った。それ以後、その畑は行かなくなり結局売ってしまった。キツネのしごとだと思うが、あんなに怖いことはなかった。

（西川サタさん 明33生）

このような話は、まだまだたくさんある。それにしても、よほど恐ろしかったのであろうか、それまでの丁寧なことから一変し、独得な方言で、とくとくと喋りだしたときのあの真剣な表情を思い出すと、単なる迷信としてかたずけてはいけないのだろうと思う。考えてみれば、不思議に思う出来事は、今でも私たちのまわりにたくさんある。それがキツネの仕業だとはいわないが、科学的な理屈の乏しかった当時のことを思えば、なるほどそういうふうにも思ってもおかしくはない。

キツネは古くから稲作農耕との関連をもち

穀霊の使者として扱われたり、田の神としての性格をもっていたりする。寺坂においても屋敷神としての稲荷に、やはりキツネの姿をみているからそれだけ人とキツネの交渉も古くからあったであろうことが想像できる。豊かな大地を背景とした、人と動物との、本来のごく自然なかかわりあいとその起源であろうか、まさに寺坂という土地や人柄を想像するには格好の資料ではないかと思う。

冒頭で、明治は遠くなりつつあると書いたが、衣食住どれをとってもその著しい相違は否定しようがない。話を聞くに従って、漠然とした感じではあるが、明治というのは「いい時代」ではなかったかと思うようになった。特に、現在の余りある物資や、生活の慌ただしさを考えればなおさらである。しかし、明治に憧れを抱きながらも、現在の豊かな生活をすべて批判しようとは思っていない。今の生活は、過去の生活習慣をどこかで必ず引き継いでいるものだと感じることもまた多いからである。永い歴史のなかで、人々が脈々と築きあげてきた生活観念が、やはりどこかで息づいているものなのだろう。遠い時代の、既に昔話として語られているようなことが、意外と新しい時代の話のなかに混在したりしているのを見つけるとうれしいものである。

しかしながら、人間をテーマとしたこれらの調査は、調査の対象が多くは老人であることそして口承によるものが大半を占めていることは言うまでもない。従って、極めて急を要するものであることを、ここであらためて認識しておきたい。とにかく、早急な、キメの細かい調査を根気強く続けていくことが必要なのだろう。

ところで、寺坂ではキツネ以外の動物に化かされたなどという話は、今のところ耳にしていない。特に比較的多く生息しているであろうタヌキの話が少ないこともおもしろい。人とタヌキとの関係は、それほど希薄なものだったのだろうか。

●タヌキも人を化かすというが、このあたりでは化かされたという話は聞かない。5～6年前、この上の池の縁に出てきた。タヌキは腹がでかいと思っていたが、そうではなく、キツネのように口が尖っていた。タヌキは相撲取りのようにでかくはなかった。

(須藤カメさん 明25生)

何かニヤリとさせられる話である。

(社会教育課 佐川和裕)

～寄贈資料～

10月～11月にご寄贈いただいた方々は次のとおりです。ご協力ありがとうございました。

資 料 名	受 入 先	地 区 名
養蚕関係資料他	紅 谷 寅 治	国 府 本 郷
掛軸他	渡 辺 慶 彦	寺 坂

(順不同・敬称略)

～資料室のうごき～

10 / 8・29

婦人学級(歴史講座)

11 寄贈資料受入(国府本郷)

27 「寄贈・寄託資料による所蔵品」展
終了

11 / 4 坊地G地点発掘調査終了(10 / 28～)

5・19・21

民俗資料調査(寺坂)

12 婦人学級(史跡めぐり)

14～15

文化財専門委員会研修(諏訪湖方面)

28 史跡めぐり(小磯幼PTA)